

氏名	村田 真一
研究テーマ	『八幡宇佐宮御託宣集』における『日本書紀』の意義
研究概要	『八幡宇佐宮御託宣集』には、第十五巻及び後の追補である第一巻に『日本書紀』が大きく引用されている。これらは従来、神功皇后三韓征討譚の展開として注目されてきた。本研究では『八幡宇佐宮御託宣集』における歴史として、「中世日本紀」の観点から、国家守護と中世神話の展開における『日本書紀』の意義を問い直すことを目的とする。

1. 研究活動の概要と研究成果	『八幡宇佐宮御託宣集』巻十五「異国降伏事」における「日本紀（記）」は、その内容が『扶桑略記』にほぼ一致する。また同時に『日本書紀』との一致が認められる「類聚国史」の引用記事が存在する。故に、『託宣集』における『日本書紀』の意義は実体としての記述内容ではなく、「日本」の史書として真実性が他の書物に優越する神話的価値にある。また、巻十五では、「靈行」「人王代（人代）」「又靈行」という三部構成で「異国」との「合戦」の歴史を構成しているが、「日本紀（記）」および「類聚国史」は仲哀・神功・応神・仁徳四代の歴史を記す「人王代」にのみ用いられている。巻十五における「日本紀（記）」の言明は、『日本書紀』「神代」に通じる「靈行」部や「聖母大菩薩因縁記」「阿蘇山縁起」などを引用して中世神話の世界を展開する「又靈行部」と区別・対置されるものとしてある。つまり、『託宣集』巻十五における「日本紀（記）」は、「日本」の天皇による異国合戦について記しており、八幡神が応神天皇と合体であることによって、中世的な世界観＝天竺・震旦・本朝という三国世界の中で、その普遍性を体現する八幡神が「日本の神」として本朝＝日本を格別に守護する神話的な根拠を示すものとしてあったということになる。
2. 学術論文・学会発表等	①シンポジウム：「八幡神の殺生と利生—『愚童訓』甲・乙本の信仰と論理」パネリスト、伝承文学研究会大会、シンポジウム「八幡信仰と伝承文学」—『八幡愚童訓』を中心に—、九州産業大学、2018年9月。 ②論文：「八幡神と仏教—放生会言説の出現と展開」、『現代思想』臨時増刊号46-16【総特集「仏教を考える」】、青土社、2018年10月。
3. 今後の課題	①『託宣集』に対する中世日本紀論を受けた具体的な神話・縁起記述の分析。とくに巻十五「靈行」「又靈行」部について。 ②他の八幡縁起類との比較。とくに『託宣集』と同時代に成立した『八幡愚童訓』との対比におけるそれぞれの特徴の追究。 ③より広範な中世神仏信仰における『日本書紀』および「日本紀（記）」という名指しの意義の論究。